

事務局の引継ぎから『東日本大震災と東京学芸大学』の出版まで

佐藤 正光
出版会事務局長

昨年6月の総会で、藤井健志前事務局長の後を受けて就任いたしました。引継ぎの際には、金谷憲他著『英語授業は集中！』の出版、山名淳著『「もじゃペー」にくしつけを学ぶ』の編集、山田雅彦著『授業成立の基礎技術』の出版契約と仕事が重なり、職務に慣れる暇もなく藤井先生に協力を仰ぎながらなんとかこなして参りました。事務局長の仕事は、印刷会社や契約会社との連絡、学会やシンポジウム等での出店の企画、宣伝活動や業者への対応、出版依頼への対応など様々ありますが、重要なことは段取りの一つでも疎かにしたり日延べしたりすると事業や刊行日程に大きく影響してくることです。幸い、2人の有能な職員が細部にまで気を配ってくれますし、これまでに歴代事務局長によって築き上げられた会計業務、発受注作業、在庫管理、編集校正作業等のノウハウと、月一回の事務局会議で相談しながらできたことが運営を可能にさせてくれた要因だと思えます。昨年度は会員の確認作業を厳密に行い、会員数の減少が顕著になりました。とくに新任の教員など新規加入者の少ないことが課題です。情報化の進展により出版物は全体として需要が減ってきておりますが、しかし大学教員にとって著書を世に問うことは重要な任務の一つだと考えます。どうぞ出版会にご加入いただきお願い申し上げます。

さて、この引継ぎと軌を一にして村松泰子学長より東日本大震災以降一年間の東京学芸大学の対応を本にして出版したいとのお話がありました。すでに東京大学がグラビア的なものを、東北大学が90人の証言をまとめた震災体験集を、また日本学校教育学会編『東日本大震災と学校教育』（かもがわ出版）が出版されておりました。本学では、震災後の教職員の行動をアンケートにより「東日本大震災等への対応について」としてまとめていましたが、後期日程、卒業式、放射性物質等への対応から被災地への支援、震災ボランティア、震災後の教育等の活動まで、漠然とした幅広い内容をどう整理するかにやや時間がかかりました。7月になって編集委員会を発足して執筆依頼対象者を確定し、7月下旬から8月にかけて教職員に、9月には附属学校校長副校長会で依頼し、10月から11月にかけて原稿提出をお願いしました。一方で、卒業生や学生によるボランティアも取りこぼさないよう加藤副学長、学生課によりボランティア参加学生による座談会を開

催するなどして計59人の執筆者により『東日本大震災と東京学芸大学』が完成しました。震災関連で受信したメールだけでも約330件、編集委員会4回、とくに学長との打合せは多数、すべての原稿に目を通していただきました。内容では、とりわけ第一章の地震直後の大学の対応は事務方の協力で記録としても貴重なものとなり、第三章のフォーラムでは学生の率直な思いが伝えられ、第四章に附属学校・園(と保育園)の様々な状況を網羅できたことも学芸大学の全体像を社会に示したのではないかと思います。このほかにも組織や個人で献身された方がいると推察いたします。仙台在住の本学卒業生が自費出版により体験記を出版されたことを出口利定先生より伺いましたが、今回はそこまでは行き届きませんでした。

本書は、本年3月11日に出版され大学より個人や様々な機関等に配布され、卒業式、入学式でも販売されました。学芸大学の総力を結集するとはこのようなことかと今は感じているところです。

このような書物をはじめ、皆様のご期待にお応えできるような書物の出版を実現すべく、なお一層努力する所存ですので、ご支援のほど心よりお願い申し上げます。

3.11 東日本大震災、この出来事を忘れない

いま2年経ち、その記憶が少しずつ失われてはいないか

大学はこのとき、何を考え、どう行動してきたのか

そして、この経験から何をなすべきで、何ができるだろうか……

本書は、東京学芸大学そして附属学校の危機対応の記録、教職員と学生、児童生徒の行動、そして子どもたちに活かすべき教育、リスク社会のなかでの学びを、50余名の執筆者によって書き上げたものである。大震災からの復興をこれからの教育につなげ、息の長い取り組みをしてゆくため、東京学芸大学がその使命を世に問う。

A5判 288頁 1785円(税込)

ISBN 978-4-901665-32-2

東日本大震災と東京学芸大学
東京学芸大学 編The Great East Japan Earthquake
and Tokyo Gakugei University

この大震災を経験して、教育の総合大学を自認している東京学芸大学は、何をすべきなのだろうか、何ができるのだろうか……



著者に聞く

『「もじゃぺー」に〈しつけ〉を学ぶ』

山名淳先生はすでに京都大学に転任されましたが、この本のご研究は本学在任中になされていたので、本出版会より刊行することとなりました。知れば知るほど深い内容に、学生にも一読を勧めたいご著書です。

Ｊ 本日は、2012年に『「もじゃぺー」に〈しつけ〉を学ぶ——日常の「文明化」という悩みごと』を東京学芸大学出版会から上梓された山名淳さんに自著を語っていただきます。
Ｙ こんにちは、この絵本のことならなんでもこい、自称『もじゃぺー』博士の山名です。

Ｊ ずいぶん大きく出られましたね。さっそくですが、ドイツの絵本『もじゃもじゃペーター』とは、いったいどのような絵本なのでしょう。

Ｙ タイトルだけ耳にするとかわいいキャラクターが目につくかと思いますが、そうではありません。『もじゃぺー』は十話の短い物語でできています。お話にでてくる主人公は、いづれも「わるい子たち」です。たとえば表題作の「もじゃもじゃペーター」では、髪や爪がのび放題で鉄できれいに整えられることを嫌う男の子が登場します。そして「きたないペーターめ」と叱咤されるのです。その他の「わるい子たち」もいろいろなかたちで不幸に見舞われます。

Ｊ 教育的であることを意図しているようで、実はその逆の性質を帯びている絵本であるように思われるのですが。

Ｙ 1845年に初版が刊行されましたが、かなり早い時期から「脅迫の教育」などと形容されて子どもたちの心に対する悪影響を心配する声が聞かれました。ただ、その一方で、少なくともドイツでは長きにわたって読み継がれてきた絵本でもあります。著者ハインリッヒ・ホフマンが生まれたフランクフルト市には、もじゃぺー博物館があり、おまけに「もじゃぺー友の会」まであります。教育的心性の産物でありながら、「教育的でない」と批判されてきたこの絵本が、しかし長きにわたって人々を惹きつけてきた理由は何なのか。その謎解きをしてみたいと思いました。

Ｊ 『もじゃぺー』を教育の絵本として再評価したいということでしょうか。タイトルにあるように〈しつけ〉という点で？

Ｙ 本書は、絵本論や〈しつけ〉論として読むことも不可能ではありませんが、いわゆる〈しつけ〉の指南書などではありません。本書のねらいは、〈しつけ〉の絵本としての側面

を有する『もじゃぺー』を対象として、教育の名のもとに行使される「文明化」の力とは何であるか、ということ問い直すことにあります。〈しつけ〉とは、私にとっては、そうした力が行使される原初の現場にほかなりません。タイトルには『……〈しつけ〉を学ぶ』とありますが、そこに込められているのは「〈しつけ〉に象徴される教育の力とは何かを再考する」という意味合いです。本書の特徴をあえて一言でいえば、異端の教育学入門書として執筆いたしました。

Ｊ 「文明化」とは何ですか？

Ｙ 「もじゃぺー」の物語を意識していえば、「文明化」を象徴しているのは、髪の毛を整えようとする鉄です。第3章以降に書かせていただきましたが、理論的には、ノルベルト・エリアスの「文明化の過程」論にもとづいて現代社会のアイロニーを教育の観点で読み解きたいと思いました。いつか「私の『文明化の過程』論」を書きたいと思っていたのですが、東京学芸大学出版会にこのたびその夢を叶えていただきました。

Ｊ なんでも『もじゃぺー』の類似本がたくさん世に出されているとうかがいました。

Ｙ はい。リュレーという研究者によれば、実に884作品もの類似本があるとされています。その後の調査では、1000作品を超えるという人もいます。これらを歴史の軸に並べて類似本の系譜を捉えてみると、教育的心性がどのように変遷していったのかを映し出す巨大な鏡のようなものとしてそれを眺めてみることもできそうです。そうした観点も、拙著では採り入れました。

Ｊ 本書ではあまりふれられていませんでしたが、現在のドイツでは『もじゃぺー』はどれくらい読まれているのでしょうか。

Ｙ わかりません。

Ｊ えっ。「もじゃぺー」博士でいらっしゃるのでは……。

Ｙ あっ、いえ、正確にはわかりませんが、『もじゃぺー』はドイツではいまだによく知られた絵本であることはたしかです。ただし、その認知度に少し変化がみられると実感しています。2013年5月にドルトムント工科大学で集中講義をさせていただいた際に、25名の受講生に『もじゃぺー』を読んだことがあるかどうかを尋ねてみました。今から20年くらい前に同年代の人たちに尋ねたときにはほぼ全員が『もじゃぺー』の読書経験があると答えていたので、今回も

」 そのように回答してくれるだろうと予想していました。ところが、25名中5名が『もじゃペー』を読んだことがないと答えました。

」 なぜでしょうか。

Y 「脅迫の教育」と揶揄されてきた側面への抵抗感が現代において高まっているのではないかと推測します。けれども、理由はおそらくそれだけではありません。『もじゃペー』を読んだことがないと答えた学生のほとんどが、トルコ、イラン、スペイン、ボスニアなどドイツ以外の国々を出身地とする両親もしくはその一方の親のもとで教育を受けていました。『もじゃペー』を伝統文化の一部として継承していく心性が、文化の多元化によってドイツ国内で曖昧になっているような気がします。そのような変化もまた、『もじゃペー』の歴史として、またそれを受け入れたり拒絶したりしている人々や社会の歴史として解釈する必要があると思います。

」 著作の表紙がとても好評だとうかがいました。

Y はい、何人もの方から表紙がすてきだと感想を寄せていただきました。『もじゃペー』の登場人物たちが街の風景にちりばめられていて、『もじゃペー』を知る人もそうでない人も、この表紙からさまざまな物語のイメージが湧き上がってくるような印象を抱いてくださっているようです。研究調査に協力してくださったドイツ人にも拙著を送付したのですが、「日本語で書かれているので中身はよくわからないが、表紙をみているだけで十分楽しい」という、著者としては喜んでよいのかどうか戸惑うコメントもいただきました(笑)。ともかく、このすてきな表紙を描いてくださった方に心から感謝いたします。

」 東京学芸大学と本書のつながりはありますか。

Y はい。東京学芸大学に1999年から2009年まで勤務させていただきました。その間、『もじゃペー』から教育を考えるというテーマをよくとりあげました。私の「十八番」でした。その授業が拙著を育ててくれました。たとえば、「国際教育論」という授業でよく『もじゃペー』を主題としていたのですが、授業の看板にある「国際」を意識して、比較史的な観点から日本の『もじゃペー』類似本なども調べるようになりました。そうした成果も、本書の構成要素となっています。

」 学生たちの反応はいかがでしたか。

ドイツで150年以上にわたって愛されてきた絵本『もじゃもじゃペーター』。もともと残酷な話だった「もじゃペー」は、さまざまな形に増殖して読み継がれてきた。その変化から、近代化としつけの関係を読み解く。

四六判 192頁
1260円(税込)
ISBN 978-4-901665-28-5



Y 授業では受講してくれた皆さんの反応から大きな刺激を受けました。教育への関心と当事者意識が高い受講生が多く、皆とても積極的に議論に参加してくれましたし、そこからさらに考察するきっかけを私に与えてくれました。本書の執筆は、そのようなわけで東京学芸大学との共同作業であったと感じています。東京学芸大学出版会で刊行していただいたことによって、教育と研究と出版が円環をなしたようで、とても嬉しく、また有り難く思います。

」 本書によってどこまで教育の核心に迫ることができましたか。

Y この点については、読者のご判断に委ねたいと思います。さまざまな角度からのご批評をお待ちしております。

」 本日は、「著者に聞く『もじゃペー』に〈しつけ〉を学ぶ」と題して、インタビューの模様をお伝えいたしました。以上、聞き手は山名、話し手も山名でした。お読みくださり、ありがとうございました。

山名 淳(やまな じゅん)1963年生まれ。京都大学教育学研究科准教授。著書として、『ドイツ田園教育舎研究』(風間書房、2000年)、『夢幻のドイツ田園都市』(ミネルヴァ書房、2006年)、『「もじゃペー」に〈しつけ〉を学ぶ』(東京学芸大学出版会、2012年)など多数。

2012年度 東京学芸大学出版会の活動に関するご報告

腰越 滋 理事・編集委員、兼事務局員

1 書籍の刊行

2012年度には以下の8冊の書籍を刊行しました(以下編著者の敬称を略させていただきます)。

- ① 地域と連携する大学研究会編『地域に学ぶ、学生が変わる——大学と市民で作る持続可能な社会』2012年4月25日発行 1,890円(税込) ISBN 978-4-901665-25-4
- ② 金谷憲・小菅敦子・日台滋之・太田洋・神白哲史編『英語授業は集中!——中学英語「633システム」の試み』2012年7月31日発行 2,310円(税込) ISBN 978-4-901665-26-1
- ③ 金子亨・速水敬一郎・清野泰行監修『絵画——洋画・版画・日本画の材料と技法』2012年8月31日発行 3,675円(税込) ISBN 978-4-901665-27-8
- ④ 山田雅彦著『授業成立の基礎技術——「教壇芸人」への道』2012年9月12日発行 1,890円(税込) ISBN 978-4-901665-29-2
- ⑤ 山名淳著『「もじゃペー」にくしつけを学ぶ——日常の「文明化」という悩みごと』2012年9月20日発行 1,260円(税込) ISBN 978-4-901665-28-5
- ⑥ 斎藤久編『重要教育判例集』2012年10月1日発行 2,100円(税込) ISBN 978-4-901665-30-8
- ⑦ 上田孝江著 東京学芸大学教育実践アーカイブズプロジェクト編『子どもとつながること——上ちゃんの保健室日記』2012年11月1日発行 600円(税込) ISBN 978-4-901665-31-5
- ⑧ 東京学芸大学編『東日本大震災と東京学芸大学』2013年3月11日発行 1,785円(税込) ISBN 978-4-901665-32-2

2011年度刊行予定が2012年度にずれ込んだ書籍もあり、刊行数のみを活動活性化の指標とすることはできませんが、目標を超える出版書籍数となりました。また⑧などは、大学をあげての事業ということで、本学にとって重要な意義をもつものです。そうした書籍を大学出版会から刊行できたことは1つの成果と言えましょう。

2 経営の状況

収入に関しまして、昨年度の総売上は約750万円で、前年度の約2.25倍となりました。これは当初売上予測の1.6倍となり、一度は積み立て金を切り崩して運営資金に充てることを余儀なくされましたが、再度積み立て金を復活させることができました(2013年度予算で200万円の積み立て)。

他方支出ですが、約740万円となり、数年ぶりの黒字となりました。とはいえ、2人雇用体制でもフルタイム稼働して頂けるだけの財源が本学出版会にあるわけではなく、依然として人件費をカバーする売り上げを、恒常的に得ていく方策が求められる状況が続いております。

こうした状況では、まだまだ会員による会費が重要な役割を果たしていると言わざるを得ません。会員の皆様におかれましては、**会費の支払い**をよろしくお願い申し上げます。

出版会としても会員サービスの促進として、**会員には出版会書籍を原則2割引で販売**いたします(但し教科書販売目的の購入を除く)。詳しくは出版会事務局にご相談頂ければと存じます。

3 営業・宣伝活動

販売につきましては、学会・フォーラム・セミナー、入学式・卒業式などの式典に直接出店することはもとより、取次店であるJRCを中心とした従来通りの体制を維持してまいります。AMAZONはWEBサイトへのアップロードが遅延しがちであること、マージンがJRCよりも高いこと等々を勘案し、直接契約の現状を見直し、改善策を講じたいと考えます。

続いて広告については、朝日新聞(10.7)、日本経済新聞(10.14)、日経産業新聞(10.18)などの他、媒体を吟味しながら学会大会プログラム等にも掲載してまいりました。

その他、11月15～12月末日に学芸大生協により東京学芸大学出版会フェアを行って頂いた他、本学図書館、国会図書館に刊行書籍を献本するなど、宣伝に努めました。

4 運営の体制

月～金の午後、出版会事務局(現在は第二むさしのホール2階の奥)に人員配置し、編集および経理の業務をしてもらう体制が定着して参りました(2人が交互に勤務)。このことにより、取次との関係が円滑化され、昨年度の大幅売り上げ増などにも繋がったものと考えられます。しかし、最大の支出費目が人件費であることも間違いありませんので、十分な財源確保のためにも今まで以上の売り上げが求められています。

なお昨年度の総会以降、副学長兼図書館長である藤井健志教授から、佐藤正光教授(日本語・日本文学研究講座)に、事務局長がバトンタッチされました。現状では毎月の例会に理事や事務局員が集まるという形態が定着しつつあり、藤井前事務局長の方針を踏襲しながら更なる発展を目論んでいる段階です。その運営の基本方針とは以下のものです。

“**教員がボランティアで支えるべき組織ではなく、売り上げ実績をあげ、その利益の中から雇用を行う事業体として、出版会は自立していくこと。その活動を通して、将来への活路を見いだすものとする。**”

そのための方策の1つとして、会員増は欠かせません。しかし新規採用教職員に対する勧誘は、これまでほとんど行って参りませんでしたので、平成25年度の課題の1つとして挙げさせていただきます。勿論、まだ会員となられていない教職員の方々にも是非会員になって頂きたいと考えます。出版会の趣旨にご賛同される教職員におかれましては、出版会加入のご検討を何卒宜しくお願い申し上げます。

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学構内 [TEL]042-329-7797 [FAX]042-329-7798
[E-mail]upress@u-gakugei.ac.jp [HP]http://www.u-gakugei.ac.jp/~upress/

東京学芸大学出版会<会報>プレスニュース(第16号)2013年7月16日発行 編集:佐藤 正光・腰越滋/レイアウト:生田 稚佳